
レイニーガール

武倉悠樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイニーガール

【コード】

N6591I

【作者名】

武倉悠樹

【あらすじ】

雨を纏う孤独な少女の優しさと悲しみを紡いだ短編。

(前書)

v i 4 5 9 2 2 | 7 9 0
^ 0 0 ^

静かに落ちる雨が街を冷たく濡らしていた。

傘を持っていなかったが故に、どこかへと雨宿りをすべく足早に街を駆けていく女性。

予期せぬ足止めに遭い、軒先で忌々しげに空を見つめるスーツ姿の男性。

重くよどむ灰色の空が街を押しつぶすように広がり、それを支えるように色とりどりの傘が儂げに咲いている。

傘を持つ人々の表情は一樣に沈んでいた。

季節の変わり目、黄昏時に降り出した雨は人々の足を鈍らせただけではなく、冷たい風をも運んできたからだ。

袖口から覗く両の腕をかき抱き、体温を逃さぬよう、身を縮こまらせる人の姿が見受けられた。

望まれぬ冷たい雨は人々を打ち続ける。

冷たく耳に残る雨音を立てて。

多くの人が目線を落とし、濡れる大地を歩くなか、一際目に付く存在があった。

傘を差さず、為すがまま雨に打たれる少女だ。

空を覆っている雨雲を視線で射抜くかのように、顔は天に。

艶やかな黒髪はしとどに濡れ下がり、顔の半分を隠しているためその表情を伺い知ることはできない。

一つわかるのは、受け止めた雨が頬を伝う様子がまるで大粒の涙を流しているかのように見えると言っただけだ。

足早に行き交う雑踏。

街は人であふれていた。

大きく開かれた傘とその色取りが一層、人の多さを感じさせる。

そんな街にあり、傘をささず立ち尽くす彼女は独りだった。

街にポカンと生まれた隙間を捜し当てたかのように、人の流れには乗らずに、彼女は広場に立つ。

何処へ往くでもなく。

雨を防ぐこともなく。

その場に居る顔ぶれがすべて入れ替わっても、彼女は動かない。

時間が彼女をより一層濡らし、体温を奪っていく。

どれほど時間が経っただろうか。

天を向き続けた彼女の顔が下がる。

一転足下を見つめ、彼女は動き出した。

彼女は人の流れを縫うようにして、そっとその場を離れていく。

彼女が去った後、残ったのは雨上がりの街だった。

雲間から指す陽の光が水たまりに反射し、街を照らし出す。

傘を畳み、相好を崩しながら、太陽を拝む人々の姿を後にして去っていく彼女は、未だに残る雨の残滓を受け止め歩いていた。

まるで雨雲を追いかけるように。

彼女はいつも雨と共にあった。

雨が降るところあれば、何処からともなく現れ、そして雨と共にふらりと姿を消す。

人々は、冷たく濡れる孤独な彼女をみると口々にこう言うようになっていた。

雨女、と。

彼女はなんのために、温もりを失い震える体で雨に打たれ続けるのか。

なぜ、誰とも関わらず、独り立ち続けるのか。

口さがない噂が後を絶たなかった。

どこかの閉鎖病棟から抜け出してきた精神疾患患者だと、汚物を見るような目を向けるものが居た。

雨が強かった日に殺された女の怨霊だと、おもしろ半分に吹聴する輩が居た。

雨を呼ぶ魔女だと、彼女に向かって石を投げつける子供達が居た。数多の奇異と嫌忌の視線が彼女を貫く。それでも彼女は独り雨と共にあり続けた。

なぜか。

彼女は雨を知っていたからだ。

人々を冷たく濡らし、足下を危ぶませ、顔から喜色を奪う雨が、いったいなんなのかを。

では彼女が知るといふ雨とはいかなるものか。

雨は悲しみに呼ばれてくるものだ。

親しい人の不幸に涙する人あれば、雨は降る。

夢破れ悔しさに歯噛みする人あれば、雨は降る。

雨とは悲しみに呼ばれて、その悲しみに暮れる人を冷たく打ちつける非情な存在。

それが雨である。

彼女は雨を知っていた。

雨が降っているところには、悲しみを抱えながら温もりを奪われ

震える人が居ることを。

彼女は思った。

なぜ、可哀想な人がさらに可哀想な目に遭わなければならぬのか。

彼女は思った。

雨に打たれる人々を救う事はできないのだろうか。

それから彼女は不幸になろうとした。

彼女は悲しみをその身にため込もうとした。

私が一番不幸になれば、雨は私を冷たく打ちつけるだろう。そう彼女は考えたのだ。

それから、彼女は冷たい雨を傘も差さず受け止めた。

冷たい雨が体温を奪った後、今度は人を避け孤独を探した。

独り雨に濡れる彼女を気味悪がった人々は悪辣な言葉を彼女に投げかける。

それは彼女にとってとても好都合だった。

心が悲鳴をあげるかと思うほど、悲しい言葉の数々だったから。

こうして、彼女は行く先々で悲しみを纏っては、雨を引きつけて、どこかへ去っていくということを繰り返した。

彼女は悲しみ続けた。

力無く濡れる誰かを雨から守ってあげられたと喜ぶ事は許されなかった。

そこに喜びを感じたとき、雨は彼女じゃない誰かを冷たく打ちつけることになってしまっから。

だから、彼女は悲しみ続けた。

心の悲鳴を無視し続けて。

ある時、彼女は自分が涙をこぼしていることを知った。いつも雨に濡れていた頬を流れているものが雨だけじゃないことに気づいたのだ。

悲しみの言葉を投げつけられても、孤独と冷たさに身を震わせていても、自分は大丈夫だと思っていた。

今までも悲しくなかった訳じゃない。

でも、その悲しみは誰かを救うためにその身のためこんだものだったから。

だから大丈夫なはずだった。

そして、だから気づかなかったのだ。

孤独と冷たさ、そして罵りと謗りが、彼女の心につけた傷がいつしか耐えられない程に深くなっていることに。

彼女は雨に打たれながらうずくまってしまった。

どうしよう。

彼女は戸惑いを隠しきれなかった。

彼女は悲しむ人を助けるために頑張っていたはずだった。

誰の何という罵声が引き鉄になったのかはわからない。

だがしかし、今まで彼女の心に溜まっていた悲しみはついに彼女の心の器から溢れだしてしまった。

自分の心を満たす悲しみに気づいたとき、彼女は動けなくなってしまうた。

どうしよう。

人々の言葉と視線が怖かった。

寒さに体の震えが止まらなかった。

心の悲鳴は雨音にかき消されていく。

為すすべもなく雨に打たれ、うずくまりながら彼女は涙を流し続ける。

誰か。

誰か。

雨を止めてはくれないか。

ふと、凍える身を打ち続ける雨が止んだ。

「驚き彼女が顔を上げると、そこには一人の少年が立っていた。

雨に濡れる彼女に傘を差し出しながら。

「お姉ちゃん、大丈夫？濡れちゃうよ？」

少年は、彼女が誰しにも疎まれていた雨の魔女であると知らないのだろうか。

雨に濡れうずくまる人に傘を差しだし、声をかける。

たったそれだけのこと。

そんな当たり前の行為は、しかし彼女に大きな衝撃をもたらした。

なんでこの子はこんな気味の悪いわたしに優しくしてくれるんだろう。

言葉の暴力と孤独にすっかり傷つき冷たくなった心に仄かな暖かみが灯る。

「寒くないの？」

少年が心配そうに彼女の顔をのぞき込む。

今までこんな言葉をかけてくれて人は居なかった。

「ボクン家すぐそこだから、この傘はお姉ちゃんにあげるよ！！」

屈託の無い笑顔で少年が善意を表す。

今までこんな笑みを向けてくれた人は居なかった。

涙はまだ止まらない。

しかし彼女にはわかっていた。

今流れている涙が悲しみから生まれたものではないことを。

だからこそ彼女は自らを諫めた。

悲しくなくなったらどうなるのかと。

- 私には悲しみを抱いて、誰かを冷たい雨から守ってあげたいと、

そう誓ったのではないか。

少年の声を聞いて、少年の顔を見て、そして彼女は感じた。人に優しくしてもらうことがどれほど喜ばしいことなのかを。

そして同時に、悲しみを抱き雨に打たれる事がどれだけ辛い事なのかも。

それを感じるのがどこの誰になるのか、彼女は知らない。それでも彼女には我慢できなかった。

自分が人の優しさで笑顔になっっているその陰で、雨に打たれ涙を流す人が居るかもしれないということが。

私は誰かのために雨を受けるのだと、そう誓ったはずだった。

再び襲ってくるであろう悲しみの恐怖に震えながら、それでも彼女は拒絶を決意する。

この少年の優しさにこれ以上甘えるわけにはいかない。

「私に構わないで……」

そう告げて、彼女は名も知らぬ優しい少年の顔を仰ぎ見る。

そのとき心配そうに彼女をのぞき込んでいた、少年の顔に陰が差した。

しかしそれは好意を否定された少年が表情をゆがめたからではない。

少年が背負うような形で太陽が姿を見せたのだ。

「あ、雨止んだね」

陽の光に気づいた少年は、空を見上げ屈託無く笑った。

いけない。

彼女は焦った。

雨が止んでしまった。

私の悲しみが途切れてしまったのだ。

彼女が人に優しくされたから。

心の温もりを求めて、その優しさを受け入れてしまったから。

雨は彼女を打たなくなった。

私以外の悲しみを探してどこかへ行ってしまった。

彼女は冷えた体を暖める陽光に包まれながら、空を見上げる。

まだ、間に合う。

雨を探して、そこへ行く。

体も心も冷たく震え、孤独に苛まれれば雨はまた彼女を打つだろう。

空を見る。

空と雲と風を感じて彼女は雨を探す。

「お姉ちゃん？」

眉をひそめ空を窺う少女の様子を訝しんだ少年が声をかける。

地面にできた水たまりに日差しが反射し、きらめく世界で雨を探す少女は気づいた。

雲が見当たらない事に。

先ほどまでの雨が嘘だったように、空は鮮やかに晴れ上がって行く。

いまや雨の気配はどこにも無かった。

雲が散った蒼穹を仰ぎ、少年は言う。

「よく晴れたね」

今まで雨に濡れ続けることしか考えてこなかった少女はその空の蒼さに戸惑うばかりだ。

まるで太陽の姿を見ようとしなないかのように、視線を泳がせ雲を、

世界を暗く覆い込めてしまふ冷たさを求める。

「あ、虹だ。お姉ちゃん、虹だよ！」

そんな彼女の目に飛び込んだのは鮮やかな虹。

冷たく悲しい雨を耐えたものの頭上にだけ輝く七色輝だ。

空は雨の上があった世界を照らし彩る。

雨は……止んだんだ。

もう悲しみに嘆く人は居ない。

彼女を打つのを最後に雨は止んだ。

魔女と、幽霊と、様々な形で罵られ、なじられた彼女に幾度目かの涙が浮かぶ。

彼女は声を殺して泣いた。

しかし、雨は降らない。

彼女の瞳を濡らすそれは悲しみではないからだ。

悲しみの癒えた世界で空は青く高く澄み渡る。

「綺麗ね、虹」

七色の光を潤んだ瞳に映しながら少女は、優しさをくれた少年に声をかける。

「うんっ！」

元氣よく応じた少年は、畳んだ傘を振り回しながら水溜りを跳ね、避けていく。

すこし離れたところで少女を振り返ると、大きく手を振る。

「じゃあね、お姉ちゃん」

少女は、作り方を忘れかけていた笑顔で少年の背中を見送る。

少年の背中が小さくなっていき、虹のトンネルへと消えていった。涙を拭いた彼女は空を見上げた。

突き抜けるような青空を。

（後書き）

皆様ご一読ありがとうございます。

コレより後書きを書きます、読後感を損なってしまう可能性に関しては先に謝罪を述べさせていただきます。

その辺り了承頂いた方だけ、この先にお進み下さい。

さて、さて、後書きで書きたいことはいっぱいあるんですけどね、
なんでしょうね、良く俺からこんな淡い童話のような世界が出てきたもんだ、って感じですかね。

絵本にしたら、森ガール辺りを攻略出来そうな感じですね、ハハツ。作者の人となりを知って、作品と作家性を混同してはいけないと言う事を学べるすばらしい寓意も込められたお得な作品となっております。

作品解説と言うか言い訳。

バトルでもコメディでも良いんですけど、僕は完全に現実に依拠して面白い話を作れるほど知識も人生経験もないので、作品を書くときはどうしても「不思議ガジェット」が登場します。魔法とか、モンスターの出る世界とか、オーバーテクノロジーな技術とかね。

で、今まではその設定というか、いかにしてそれが稼動している

か、世界に仕組みとして定着してるかを考えるのにかなりの作業量ウェイトを置いてたんですが、いかせんそれでは終わらんと、と高2の数学で6点を取った男に細かく不思議理論が作れるのか、といや作れないぞ、と。

で、それを諦めて不思議が不思議として在る世界をはなから読者の方には承認してもらおう、という形にしました。短編という形ゆえでもあるんですけど。今回で言うと「雨は人が悲しんでるときに降るもの」という概念です。

そういったことでちよっぴり漠とした世界観が今回の作品には漂ってきてる、様な気が。出来ていれば幸い、的な。そんな感じです。

最後に、表紙絵を「蒼生遊楽さん」に描いて頂きました。

多謝多謝。なっ？

読んでくれた方にも多謝多謝。

他の作品も読んでいただケルト究極感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6591i/>

レイニーガール

2010年10月8日15時07分発行